

井筒屋だより

第五十号
令和六年
十二月号

来年没後40年

坂本九のパネルを展示

井筒屋2階の展示コーナーに坂本九の新たな写真パネルが設置されました。

坂本九といえば昭和を代表する歌手で、「上を向いて歩こう」は世界的な

披露宴を開くなど、終生、笠間とのつながりを大切にしてきました。

このほど展示された写真パネルは、かつて、「九ちゃんの家」に展示されていたもので、地域の方によって保管されていたものです。

少年期の第2次世界大戦中に笠間に疎開し、その縁で笠間稲荷を信仰。笠間稲荷で結婚式を挙げ、井筒屋旅館で

時のスナップなど、笠間とのつながりを感じられるものとなっています。



2階に設置されたパネル(上)と1階階段にあるパネル

本年もありがとうございました

年末は24日まで、年始は元日から開館です。本年もかさま歴史交流館井筒屋をご愛顧いただき、ありがとうございました。

12月には、大町恒例の「お火祭(おひまじ)」が行われ、井筒屋の神棚に愛宕神社のお札が祀られます。また、年末年始の開館日と開館時間は、別表のようになっていきます。



火	水	木	金	土	日	月
24	25	26	27	28	29	30
開館 9:00~ 21:00	休館	休館	休館	休館	休館	休館
火	水	木	金	土	日	月
31	1	2	3	4	5	6
休館	臨時開館 ~4:00	開館 9:00~ 19:00	開館 9:00~ 19:00	開館 9:00~ 21:00	開館 9:00~ 21:00	開館 9:00~ 21:00
臨時開館 22:00~	開館 9:00~ 19:00					

かさま歴史交流館井筒屋 笠間市笠間 987 電話 0296-71-8118

開館時間 午前9時~午後9時

~このお便りでは、井筒屋の日々の様子やイベントの開催予定等をお知らせしています~



歴史くらむ

浅野長直の功績

浅野内匠頭長矩の曾祖父である浅野長重が笠間藩主となったのは、元和8(1622)年。そして寛永9(1632)年に、その長子である浅野長直が、23歳であとを継いで藩主となった。

長直の功績は、近代まで続く笠間の町と城の基盤を整備したことだ。

浅野氏以前の笠間藩は3万石なのに対し、浅野氏は5万石。家臣の数も多く、侍屋敷が不足したため、新たな町を整備した。現在も地名が残る大和田や四ツ谷、五騎町、



浅野長直像(花岳寺蔵)「笠間市史」より

御旗前、鷹匠町、梅ヶ枝町、鉄砲町などは、この時、侍屋敷としてつくられた町である。また商業地区として、大町の西側の田んぼを埋めて、新町をつくった。これ以降、愛宕町、大町、高橋町、荒町、新町が五力町とよばれ、笠間の商業地区の中心となった。

城については、佐白山の上にある城では、町から登城するには時間がかかるため、現在の佐白公園あたりに平屋づくりの役所を建て、政務を行うようにした。これが、下屋敷と呼ばれる建物で、その後の浅野家以外の藩主も、ここで政務を行うようになった。ところが、この下屋敷が「浅野家は幕府に無断で新しい城を築いた」と見なされ、長直が36歳の正保2(1645)年、播磨の国赤穂へ国替えとなったのだ。

その後も長直は、城がなかった赤穂の地に、幕府の許可を得て城を築くことになる。笠間と赤穂で町や城を整えた長直は、「城下町建設の父」といえる。

(雄)

【井筒屋ニュース】

菊まつり、大賑わいで終了しました！



きつねの祭典に大勢の人が参加



栗の形をしたオカリナ(クリーナ)の演奏



幻想的なライトアップ

笠間の菊まつりが終了しました。今年は暑かったこともあり、満開がいつもより遅かったのですが、大勢のお客様が詰めかけ、大盛況でした。

井筒屋だより
おかげさまで50号

井筒屋だより
必須な読み物！ルールブック・お楽しみ企画満載！

「井筒屋だより」は、今年で50号となりました。12月から、1階のカウンターと2階の展示コーナーにバックナンバーのファイルを置かせてもらいます。ぜひ、ご覧ください。

井筒屋だより 創刊号

「井筒屋だより」は、今年で50号となりました。12月から、1階のカウンターと2階の展示コーナーにバックナンバーのファイルを置かせてもらいます。ぜひ、ご覧ください。

【後記】

今年の話題といえば、なんといっても大谷翔平の50-50。本来、40本塁打、40盗塁でも困難な記録であるはずなのに、あっという間にそれを超えてしまいました。そんなことは、簡単にできるはずはありません。地道な努力を積み重ねた結果なのでしょう。

井筒屋だよりは今年、50-5000を達成しました。通算50号で、発行部数5000部です。創刊時はわずか500部でしたが、その10倍になったわけですね。これはひとえに、井筒屋をご愛顧いただいています皆様のおかげです。ありがとうございます。

次は1000号を目標に、これからも発行を続けますので、よろしくご支援をお願いします。

(雄)